

論点



いませ まさし
今瀬 政司

NPO法人「市民活動情報センター」代表理事。大阪市総合計画審議会委員。41歳。

バスは、単なる移動手段でなく、人と人とのふれあいを生み出し、地域の人たちを元気にする貴重な存在であり、協働のまちづくりのきっかけを生み出すものである。

私はそう考えて、身近なバスやバス停留所を、市民自身が自分たちのものとして、行政職員らとともに、運行管理、利用していくための仕組みづくりに取り組んでいる。

仲間たちと実態把握するため、大阪市内のバスに乗り、バス停留所を回り調査をし始めた。市営の小型コミュニティバス「赤バス」の中では、2人のお年寄りが楽しそうに会話を

バスの見直し

している。そこに、ベビーカーに子どもを乗せた女性、次に車いすを使った男性が乗り込んできた。乗客同士が向かい合う狭い車内は、和やかな雰囲気包まれた。

バス、特に小型のコミュニティ

話しかけ、自然と会話が生まれる雰囲気がある。

日ごろよくバスを使う人の中には、バス停に愛着を持って、いすや座布団を置いたり、花を飾ったりする人が少なくない。あるバス停ではバスを待つ間、

市民による地域社会再生

イーバスの中では、自然と会話が生まれやすく、乗客同士が和みやすい。あるバス停を調べていると、バスを待つお年寄りが、「何の調査かね、わしで分かることなら何でも教えてやるよ」と笑顔で話しかけてきた。バス停では、バスを待つ間の時間、知らない者同士でも気軽に人に

バス停付近を掃除しているお年寄りの女性を見かけた。その女性にはバスが来ると、ホウキと塵取りをバス停の留め金に引っ掛けて、バスに乗り込んでいった。こうした光景からは、バス停は自分の大事な場所なんだ、だからいつでもきれいにしておきたいんだ、という意識が伝わっ

てくる。バスの利用者は年々減少し続け、全体としては利用率の低迷と経営の悪化で、運行本数の減少や路線廃止等の悪循環に陥るケースが多い。大阪市でも、市営バスの一部路線廃止や高齢者無料バス(敬老優待乗車証)の一部有料化など、市営バスの縮小という改革に着手し始めた。

時々公共の温泉に行くというように、高齢者の「閉じこもり」を防ぐ役割も果たしている。バスを巡る調査から、これからの地域社会の再生のあり方が見えてくる。高齢化や孤独化、コミュニケーションの場の減少といった課題を解決する地域づくりの貴重な資源として、バスが本来的に持つ人と人とのふれあいのサロン機能は有効だ。高齢者ら利用者の市民自身が、そうしたバスによる地域再生の担い手になっていく。それが結果として、バス自体の利用率向上や収支改善にも結び付き、地域社会全体を元気にする。行政においても、バスを交通政策としてだけでなく、まちづくりや福祉政策として位置づける構造改革が必要となる。市民と行政の協働が地域社会を再生させるのである。